

【注意】

答えはすべて、(その8)の「解答らん」に書き入れなさい。本文中の句読点や記号はすべて一字と数えます。

一次の文章は河合隼雄『日本人の心のゆくえ』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には省略および表記を一部変えたところがある。

最近一般によく聞かれる論調に、「ものは豊かになったが、ここは①貧しくなった」というのがある。それがもっと短絡的に展開されると、西洋の「物質文明」によって現代の日本人は毒されているので、日本の古来の精神を復活し、こころのつながりを回復しなければならぬ、という具合になる。このような論はあまりに単純である。そもそも日本人のことを欧米人が※エコノミック・アニマルと呼んだりするのを、この人たちはどう考えているのだろうか。それに日本の「古来の精神」というのは、そもそも何だったのだろうか。それほど容易にそれは復活できるものなのだろうか。疑問はつきつきと湧いてくる。

ここでまず認識すべきことは、西洋から伝わってきた「もの」に関する文明は、心と物との明確な区別という前提に立ってこそ生じてきた、という事実である。※今世紀になって急激に発展した科学技術は、心と物の、※主体と客体などの明確な区別を前提とする方法論によっている。

石を切るにしても「a」切る技術と、科学と結びついた石切りの機械を駆使して切るのでは、その態度に根本的な差がある。前者の石は、「もの」としての性格を有しているが、後者では、石は「物質」であり、人間が操作し得る存在である、と見なされている。そんなわけで、今われわれが接している豊富な「もの」は、日本人がそれにどう接するか、どのように考えるべきか、まったく知らなかった「物」なのである。1多くの日本人がそのために「こころ」を奪われてしまうのも無理のない話である。

現代の日本人は、そもそも、ものところを区別しない世界観で生きてきたところへ、急に、今までわれわれの知らなかった「物」が侵入してきた状態のなかにいるのだ、と思うと、いろいろな様子が了解されてくる。ものところが区別されず、そうして物質がそれほど豊かでもない生活では、日常生活における「もったいない」などということが、宗教も※倫理も包含することとして機能していた。ところが、それとまったく根柢の異なる「物」が豊富に手に入るようになったため、日本人としての宗教や倫理の根本を崩されるようなことになったのである。いったい、われわれは子どもに対して、どのように宗教や倫理について教えていいのか、わからなくなってしまった。

兵庫県に生野学園という不登校の子どものための全寮制の高等学校がある。実にユニークな学校であるが、その村山実校長先生と対談したときに、興味深い話を聞いた。村山先生によると、「あの子たち、ご家庭の経済背景はものすごい豊かですけど、2食生活は貧困です」「味オンチが多いです。それがおいしいねえと心から言えるのに一年以上、心からうれしそうな顔をして食べるのに二年かかります」ということである。村山校長は、このような学校の寮では※厨房が大事であると考え、適切な人を自ら探し出してきた。そして、この学校では、職員会議に厨房の人も出るとのこと。子どもたちがどのようにして、どの程度に食事を食べるかが、教育上非常に大事なことになるという。

「経済状態が豊かで、食生活は貧困」とはどういうことなのだろう。確かに、わが国の経済状態はよくなった。すべての点で、物もたくさん手に入るようになった。それにもかかわらず、どうして食生活が貧困なのか。ここで村山先生の言っておられる「貧困」は食べるものがないとか、栄養価が低いという意味ではない。「おいしい」と感じられる食生活の機会が少ないことを言っている。

昔、われわれが子どもの頃は、食べるものが少なかった。しかし、そのためにかえって、五月の節句の柏餅のおいしかったことなどは、今でも忘れられないほどである。家で餅を搗き、柏の葉を山で取ってきて、家族一同で柏餅をつくって食べる。おいしくないはずはない。ここでは、すでに述べたように、こころとものとの区別以前の感覚がはたらく、食べることによって「味わう」ことは、実に「豊かな」内容をもっている。しかし、このようなことが可能だったのは、昔は適当にものが不足していたからである。

ところが、最近になって豊かになったものは、たとえば自動車、ステレオ、いろいろな電機製品など。それによって人間の生活は快適で便利になる。しかし、それを得るためには人間は働かねばならない。②働くために時間を節約しなくてはならないし、疲れるのであるべく心を余計なこと——と言っても、ほんとうはこちらの方が大切なのだが——に使わないうようにしようと思う。そうすると、家庭の食事を家族で楽しむ、ということがなくなつて、「貧困な食事」になってしまふのではなからうか。心と物を分離した後で、今度は、物が心を圧迫している、というのが現状ではないだろうか。むしろ、物が心を操作しているとさえ言えるのではなからうか。

心と分離したものは、計測することが可能である。重さ、大きさ、などなど。それに貨幣価値ということによって、すべてのものが直線上に価値づけられる。料理にしろ、その値段ということによって計測するかがり、すべてが上から下まで一様に順序づけられる。

すべてが一樣とは、色合いの差がない、ということだ。値段によって計測されると、すべてのものは灰色になってしまふ。しかし、「味」というものはそんなに単純ではない。同じビールでも、いつ誰と、どこで飲むかによって味は異なるはずである。各家庭の料理は、その家庭の味をもっている。「経済的に豊か」ということに、人々がこだわりはじめると、その人は「味オンチ」になってしまふ。「ものが豊か」とは、その色合い、味わいの多様性に気づくことではないだろうか。このように考えると、現代は、ほんとうに、ものが豊かなのかどうか^③危うくなつてくるのである。

このような点を^④強く意識し、心の豊かさを取り戻すために、現代でも、山奥に住んで自給自足の生活をしたりする人もある。これは立派なことと思うが、すべての現代人がこれができることはないだろうし、今後、人類がその方向に進んでいくとも思えない。科学技術の発展をとめることなど、誰もできないだろう。

西洋の科学技術に追いつけ追いこせでやってきて、日本人は今後もその道を歩みつ、自分の生き方全体について考えをするならば、^⑤どんな生き方があるだろう。物が少ないことを前提として行なってきた宗教や倫理の教育法は、もう通用しないであろう。

日本には、長い「物語」の伝統がある。キリスト教文化圏と比較すると、比べものならぬほど早くから『源氏物語』をはじめとする、多くの名作をもっている。『竹取物語』は九世紀の作品だが、[※]ボッカチオの『デカメロン』は十四世紀の作品である。日本において、これほど^⑤早く「ものがたり」が生まれてきたのは、日本における「もの」のもつ意味の深さ、広さと大いに関係していると思われる。それは、神、人、動物、無生物すべてを含み、人間のこころからだ、たましい、それらすべてを包みこむ「もの」の語りであった。

本居宣長は、『源氏物語』は「[※]もののあはれ」の[※]具現であると考えた。私は『源氏物語』を読んだとき、「もののいきおい」「ものの流れ」を感じた。無限に変容しつつ[※]滔々と流れる「もの」の姿、そのとどまるところを知らぬいきおいが、そこに描かれていた。その美的側面に注目すれば「もののあはれ」ということになるだろうが、『源氏物語』は「もののあはれ」のみを描いているものではない。それは「もの」そのものが語っている、と言いたいほどに、「もの」の姿やはたらきを見事に言い表わしている。

西洋の近代は、物と心を分離したために、「ものがたり」を嫌った。それは心について述べようとしたら、物を描こうとしたりした。そして、それは「現実」を描いていると思った。しかし、その現実は一面的なものであったと言うべきであろう。

現代はむしろ、物と心の分裂による傷を癒したいと願っている。この傷を癒すはたらきをもった「ものがたり」の必要性を感じはじめている。これに関して、日本の平安時代の「物語」は多くの[※]示唆を与えてくれる。しかし、だからと言って、われわれは昔の「物語」に単純に戻ることはできない。すでに現代人としてのわれわれは「物」に取り巻かれ、それなしでは暮らせない状態になっているからである。

おそらくここでわれわれにできることは、^④物を物として取り扱い、それを操作しながらも、それは「もの」としても見られることを思い起こし、あらたな「ものがたり」を創り出すことではないだろうか。「もの」は物と心に分解してみることができ、そのときに大切な「もの」が失われる。さりとて^⑤「もの」をそのままで見ているのでは、近代社会のなかに生きていくことができない。このあたりのことをよく弁えながら、われわれにとつての新しい「ものがたり」は何かを考え出していかねばならない。

※短絡的…物事の本質を深く考えずに、単純に考えてしまうさま。

※エコノミック・アニマル…経済的な利益の追求ばかりを考える人を批判した語。 ※今世紀…ここでは二十世紀のこと。

※主体と客体…主体は、行為を他に及ぼすもの。客体は、行為を受けるもの。 ※倫理…道徳。 ※厨房…台所。

※ボッカチオ…イタリアの作家。『デカメロン』は近代小説の先駆け。 ※もののあはれ…しみじみとした味わいのこと。

※具現…具体的な形として表すこと。 ※滔々と…水がとどまることなく流れるさま。 ※示唆…それとなく知らせること。

問1 線①～⑤の中には文法的に性質の異なる語が一つだけある。その語と同じ性質を持つものを、次のア～エの線の中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 来週も、おそらく雨は降らないだろう。

イ 何に価値をおくかは、その人のそれまでの生き方と関係がある。

ウ ようやく春の気配が感じられるような季節になった。

エ 親は誰でも、自分の子供は強く、たくましく育つてほしいと考えているものだ。

問2

a

に当てはまる最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どこを切ったら仕事の能率がよいか考えて
 イ 石が切って欲しいと思っている線に沿って
 ウ 自分の技術や道具を正確に使って
 エ 親方から教わった方法を忠実に守って
 オ 最も切りやすい角度をしつかり計算して

問3

線1「多くの日本人がそのために『こころ』を奪われてしまう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 昔の日本人は心がないと物は生まれないと考えていたので、物と心を分ける科学技術が生んだ大量の物に出会ったとき、それらの価値がわからなかったが、そうした物の価値がわかるようになると、心は余計なものだと思ふようになったということ。
 イ 昔の日本人は物と心のつながりを感じていたので、物と心を分ける科学技術が生んだ大量の物に出会ったとき、それらの意味がわからなかったが、物と心を区別できるようになると、こうした物の意味もわかるようになったということ。
 ウ 昔の日本人は物も心を持つと信じていたので、物と心を分ける科学技術が生んだ大量の物に出会ったとき、それらへの接し方がわからなかったが、そうした物が生活を満たすようになると、物の魅力みりょくを理解するようになったということ。
 エ 昔の日本人は物と心が一体になっていると思っていたので、物と心を分ける科学技術が生んだ大量の物に出会ったとき、それらの正体がわからなかったが、こうした物が生活の中に入り込むと、物と心を分けて考えるようになったということ。
 オ 昔の日本人は物より心が大切だと思っていたので、物と心を分ける科学技術が生んだ大量の物に出会ったとき、それらの価値がわからなかったが、そうした物が豊富に手に入るようになると、物の方が大切だと思うようになったということ。

問4

線2「食生活は貧困です」とあるが、子どもたちの「食生活」が「貧困」になるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもたちの親は競走に勝ち残るためだけに仕事をし、他の人々を敵視する習慣が身についているので、家庭の食事でも子どもと打ち解けることができなくなった結果、子どもたちは家族そろって食事をしても楽しめなくなったから。
 イ 子どもたちの親は経済的な豊かさや便利さを得るためだけに働き、家族を大切にすることだと思ふので、家庭の食事は無駄むだなことだと考えるようになった結果、子どもたちは家族そろって食事ができなくなったから。
 ウ 子どもたちの親は便利で豊かな生活を手にすることだけを目的にし、節約は良いことだと思ふので、家庭の食事でも粗末そまつなものしか食べなくなった結果、子どもたちは家族そろって食事をしても楽しめなくなったから。
 エ 子どもたちの親は金持ちになることだけを目標にし、いつも何かに追いかけているように焦あせっているため、家庭の食事を時間無駄だと考えるようになった結果、子どもたちは家族そろって食事ができなくなったから。
 オ 子どもたちの親は経済的な豊かさを一番大切だと思ひ、値段によつてものの価値を決めるので、価値が感じられない家庭の食事を余計なことだと考えるようになった結果、子どもたちは家族そろって食事ができなくなったから。

問5

線3「どんな生き方があるだろう」とあるが、日本人はどのような「生き方」をめざしたらよいと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 新しい物語をつくるために、日本の伝統的な考え方の長所と短所を理解した上で、日本の伝統的な考え方を大切にすること。
 イ 新しい物語をつくるために、日本の伝統的な考え方と西洋の考え方をよく理解して、両方の良い点を利用すること。
 ウ 新しい物語をつくるために、西洋の考え方の欠点と日本の伝統的な考え方の利点を比べて、西洋の考え方から離れること。
 エ 新しい物語をつくるために、日本の伝統的な考え方の欠点を西洋の考え方で補いながら、本当の豊かさを求めること。
 オ 新しい物語をつくるために、西洋の考え方が作り出した現在の便利な生活を捨てて、豊かな日本の自然を利用すること。

語

(その3)

問6

線4「物を物として取り扱い」、線5『もの』をそのまま見ていた」とあるが、線4を「前者」、線5を「後者」として、両者の違いを55字以内で説明しなさい。ただし「物」「心」の二語を必ず一回以上使うこと。なお、[解答らん]に「前者」「後者」「物」「心」を書くとき、「」をつける必要はない。

国

二次の文章は伊集院静『少年譜 笛の音』の一部である。中里恒助・トメ夫婦は、親のいない赤ん坊をある事情から引き取るこ
 とになった。以下の文章はそれに続く部分である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には省略お
 よび表記を一部変えたところがある。

同年四月八日。中里恒助、トメ夫婦はかねてから※全幅の信頼を寄せていた徳楽寺住職に赤児の事情を話し、名前を申彦と命名して
 貰い、住職から※仏誕の当日にちなんで赤児の誕生日を同日にしておくように言われた。

……三年後、昭和三十六年八月。中里トメは段々畑の草刈りに一人息子、ノブヒコを連れて出かけた。段々畑の畦道に※筵を敷き、
 息子の腹をおぶり紐でくくり、柿の木につないで夏草を刈っていた。

一段下の芋畑の周囲の草を刈っていた時、①息子の泣き声に気付く、あわてて柿の木の下に駆け寄ると、息子のそばから虻
 が一匹逃げて行く姿が目飛び込んだ。噛まれたか、と息子の身体を見ると、握りしめた右手の小指と薬指に蛇の歯跡らしきものがあ
 り、うっすらと血が滴っていた。トメはすぐに息子の指から血を吸い上げて吐き出したが、泣き声は止まなかった。彼女は息子をか
 かえて山を駆け下り、材木所の自動車を出して貰って病院に行った。※血清を射って貰い、命に別状はなかったが、噛まれた二本の指
 の膨れが引かず、紫色の斑点がひろがっていた。ようやく膨れがおさまった後も右手の先半分は真紫の痣が残った。

息子の二本の指が※歪に曲がったまま動かなくなっているのを知ったのは、その冬のことだった。己の不注意で我が子の手が不自
 由になったことを責め、嘆き続けるトメを恒助はその冬の間中なぐさめた。

昭和三十八年四月。徳楽寺本堂。

目前に中国山地の峰々が連なっていた。

夜明け方、谷間をおおっていた霧は失せ、強くなりはじめた陽差しに山の尾根の境界があわく霞んでいた。つい半月前まで冬の冷氣
 に寒そうに映っていた山肌が、芽吹き出した無数の木の芽でやわらかく感じられた。

一人の少年が本堂の濡れ縁の角に雑巾を手立って、その山並みを眺めていた。

——遅い山の春がや々と来たんじゃないや……。

少年の顔がほころんだ。

少年のつづらな瞳はじつと峰々を見つめていた。

あつ、と彼はちいさくつぶやいて連なる尾根の中腹を見据えた。そこに一条の煙りが立ち昇っているのがかすかに見えた。少年の居
 る場所から煙りまではずいぶんと距離があり、この山中では鷹か鳶の眼でしか見分けられないほど濃いさな煙りであったが、その煙り
 の出処に父の恒助が居るのを少年は知っていたから、探し当てることができた。

春霞にまぎれそうな煙りに恒助の笑顔が重なった。

「ノブや、ほれっ、あの杉木立ちの下を見てみんさい。ウサギの耳がのぞいとるぞ」

初めて父と山に入った時の楽しい時間が思い出された。

もう十日も恒助の顔を見ていなかった。この季節、父は山に入ると半月余り家に戻ってはこなかった。炭焼きの煙りだけが恒助の声
 だった。母のトメの目はすでに近くのものさえ見分けがつかないほどだから、彼がトメに煙りのことを教えてやる。

昨晚も家に戻ってそのことをトメに話してやった。

「お父さんの煙りが立つとったぞ」

「そうかや、お父さんは精を出しとるげの」

トメは嬉しそうに答えた。

自分が大きくなれば父の仕事を手伝ってやれるのに、と少年は思う。

1 背後でノブヒコを呼ぶ和尚の声がした。

「ノブや、掃除は済んだか」

「はい、済みました」

ノブヒコは和尚を振りむいた。

「何を見とったのじゃ」

「お父さんの炭小屋の煙りが見えます」

ノブヒコは煙りの昇る方角を指さした。

「お父やんじやない。家の者以外に話をする時は父と言いなさい。おまえはもう数えて六歳じや。六歳の子が言葉遣いを間違えてはいかん」

「は、はい」

和尚は年が明けてから急に言葉遣いに厳しくなった。

この春から、ノブヒコはそれまでの週に二日の寺での宿泊を一泊増やされて、三日、勉強に通っている。家に居る時間が少なくなったのは少し淋しいが、文字を覚えることも漢詩や教本を読むことも、算数を習うことも楽しかった。机についての勉強だけでなく、和尚からは剣道の手ほどきも受けていたし、ノブヒコの吹く横笛に合わせて尺八を吹いてくれることもある。2 和尚の下で勉強することとは恒助とトメとの約束だからノブヒコは一生懸命に学んでいる。ただこうして和尚について学んでいることが何になるのかノブヒコには想像もつかない。早く大人になって恒助の仕事を手伝ってやりたいし、大好きな山の中を一人で歩き回れるようになりたい。

「本堂の東裏の※樋が詰まっておる。見てきなさい」

ノブヒコは寺に居る間、勉強だけではなく、和尚に命じられた用事をすべてこなさなくてはならない。

彼は本堂の床下から梯を取り出し、本堂の※東手に回り樋を見上げた。どこが詰まっているのかわからない。ノブヒコはじつと樋を見つめた。

「わからねば、まず見よ。わかるまで見よ」

和尚の言葉である。

幼い頃からこの寺には何度も来ていたし、自分の名前をつけてくれた人ということも知っている。恒助とトメはこの人の言うことはすべて有難く聞いていたし、父と母は自分たちの暮らし以外では和尚の暮らしだけを気にかけていた。

樋のどこが詰まっているのかわからない。それでも和尚の教えどおり彼は樋を見続けた。すると南手と東手がぶつかる樋の角にわずかに枯れ枝のようなものが覗いているのが見えた。梯をかけて登って行くと、けたたましいカラスの音がすぐ左下の松の枝から聞こえた。樋まで登ると、やはりカラスの巢があり、卵が見えた。本堂に戻って和尚にカラスの巢のことを告げると、取り除けと言われた。でも巢の中に卵がありました、と言うと、取り除きなさい、と今度は厳しい口調で言われた。ノブヒコは返答をして東手に行った。屋根瓦の上にカラスが一羽とまり、ノブヒコを威嚇するように鳴いていた。ノブヒコは梯を登り、狂ったように騒ぐカラスを払いながらふたつの卵をポケットに仕舞い、巢を手にして梯を下りた。そうして墓地裏に行き、草叢に巢を置き卵をそっと入れた。

書道の時間になり、ノブヒコは本堂の隅で墨をすりはじめた。墓所の方から先刻のカラスの音がしていた。ノブヒコは卵のことが気になって※松煙墨を持つ手を止めて墓所の方に首を伸ばした。

「雑念を捨てよ。墨はここをこめてすりなさい」

経を読んでいたはずの和尚の音が堂内に響いた。はい、と返答し、彼はあわてて墨を持ち直そうとした。途端に不自由な右手の指から墨が零れて床に飛んだ。床板に落ちた墨がふたつに割れて転がった。洗い場に駆け出し雑巾を持って戻り、床を拭いた。またカラスの音がした。和尚の経を読む声が止み足音が近づいた。

「鳥が気になるか。卵はどうした」

ノブヒコは巢と卵を墓所の裏手の草叢に置いたことを話した。ついてきなさい、と和尚に言われ、彼は和尚のあとについて墓所を抜け、先刻、巢と卵を置いた草叢に入った。

「見てみなさい。卵はすでになかろう。イタチか何かが持つて行ったのだろう。巢も卵もおまえが打ち捨ててはいけないのだ。おまえがしたことは3 自然の摂理に反している。摂理とは仏の意志だ。鳥が巢を作る場所を間違えたのだ。あの場所でヒナがかえつてもいずれ蛇に喰われたらう。生きるものには領分がある。山に住むもの、海に住むもの、それぞれがそこで生きて行く」

ノブヒコには和尚の話のすべてを理解することはできなかったが、自分のしたことに間違いがあったのだと思った。

彼は本堂に戻り、半欠けになった松煙墨をすった。すり終えると和尚に準備ができたことを告げた。和尚がやってきて筆を手にとると床に置いた書写板の右上にその日の字の手本をゆつくりと書いた。ノブヒコは筆順をしっかりと覚えようと和尚の筆の動きをくいいるように見ていた。② 晴雨とある。

「セイウと読む。セイはハレとも読む。天氣が良いことだ。ウはアメのことだ」

ノブヒコが最初に書く字だけを和尚はたしかめて席を立つ。筆順、始筆、送筆、終筆が違っていればその場で教えてくれる。あとは板の上に何度も同じ字を書き、その読みを声に出して言う。板が字で埋まると雑巾で洗い、また書きはじめる。時間になれば書写板を和尚の下に持って行く。よし、と言われれば終わりになるが、首を横に振られると、また板を洗い直して一から書き出す。貧乏寺だから

ら紙は貴重品で使わない。すでに一年になるが、^ほ誉められたことは一度もない。けれど和尚から、よしと言われると胸の中が高鳴る。時間がある時は庭の土の上に覚えた字を書くし、指で宙に書くこともある。和尚がそうするようにと教えてくれた。家に帰り、恒助やトメに何を習ったかと訊かれる。習ったもので答えられなかったものはひとつとしてなかった。恒助もトメもノブヒコが地べたに書く字や算数の計算をじつと見聞きして嬉しそうにうなずいていた。

※全幅の：最大限の。

※仏誕：お釈迦さまの誕生日。

※筵：わらなどを編んで作った敷物。

※血清：蛇の毒を解毒するための注射。

※歪に：形がゆがんでいるようす。

※樋：屋根のへりに取り付けて雨水を集めて、地上に流す装置。

※東手：東側。

※松煙墨：松の枝や根を燃やして得たすすを固めて作った墨。

問1

①に当てはまる最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 火が消えたような

イ 火が出たような

ウ 火を灯したような

エ 火が点いたような

オ 火に油を注いだような

問2

線②「晴雨」について、次のⅠ・Ⅱに答えなさい。ただし□内の漢字は、それぞれ一度しか使えないものとする。

Ⅰ「晴」と「雨」の二字と、後の□内の漢字から選んだ二字を組み合わせて、四字熟語を一つ作りなさい。

Ⅱ次のア～ウの文の状況を表す四字熟語を、後の□内の漢字を組み合わせて、それぞれ作りなさい。

ア わたしたちも四月からはもう中学生だから、気持ちをしっかり切りかえよう。

イ 僕らのチームは一発のホームランにより、絶望的な状態から盛り返して試合に勝った。

ウ 今回の出来事は、今まで誰も経験したことがないようなめずらしいものだった。

新	読	聞	生	機	死	来	回	問	心	起
不	前	動	耕	転	期	一	未	無	代	天

問3

線1「背後でノブヒコを呼ぶ和尚の声がした」とあるが、和尚に対するノブヒコの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 和尚の教えは仏の教えにも等しいほど有難いものであり、教えられたことは何でも身につけようと考えている。

イ 和尚は父と母が誰よりも尊敬している人物だから、和尚の教えはしっかり守ろうとひたむきに考えている。

ウ 父の炭焼きの仕事を早く手伝えるようになるために、和尚に言われたことはすべて身につけようと考えている。

エ 六歳になってからなぜか急に厳しくなった和尚に戸惑いつつも、和尚のような立派な人物になりたいと考えている。

オ 大好きな山歩きを我慢するのはつらいが、和尚の教えは役に立つことばかりだからしっかり勉強しようと考えている。

問4

線2「和尚の下で勉強することは恒助とトメとの約束」とあるが、このような約束をさせた恒助とトメの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 幼い頃に蛇に噛まれ手に怪我を負ってしまったノブヒコは、手が不自由になってしまったので、和尚の下でせめて学問だけでも身に付けさせて立派な人間に成長させたいと願っている。

イ 大きくなったら父の炭焼きの仕事を手伝えたいというノブヒコの希望を知り、寺で和尚から勉強を教えもらうことで、炭焼きになるために必要な知識を早く習得してほしいと願っている。

ウ もらわれた子であることを引け目に感じているノブヒコを、自分たちが最も尊敬している和尚に預けることで、我が子と同じように大切にしているのだとノブヒコにわかってほしいと望んでいる。

エ 炭焼きの跡取りとして大切に育てているノブヒコが山で必要な知識を学べるように、山の生活に詳しい和尚のもとへ通わせ、少しでも早く仕事を手伝えるようになることを望んでいる。

オ 我が子のように大切なノブヒコの手が自分たちの不注意で不自由になったことを悔やみ、誰よりも信頼している和尚の下で、学問を始めとしたさまざまなことを多く身に付けてほしいと願っている。

問5 — 線3「自然の摂理」とあるが、ここでの「自然の摂理」とはどういうことか。40字以内で具体的に答えなさい。

問6 本文全体から読み取れる和尚の人物像はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 仏の教え以外の学問は必要がないと考え、仏の意志に逆らうものはたとえ弱い動物や小さな子どもであっても決して許そうとしない厳格な人物。

イ 不在がちなノブヒコの父親代わりとなつてさまざまなことを教えながら、いつも優しくノブヒコの世話をし、常に適切な助言を与えてくれる人物。

ウ 子どもだからといって特別にものごとをやさしく嘯み砕いて説明するのではなく、幼いノブヒコに対しても子ども扱いせず厳しく接する人物。

エ 名付け親としてノブヒコが赤ん坊の頃から成長を見守っているが、ノブヒコがなかなか学問を身につけられないため焦りを感じ厳しくしつけをする人物。

オ 相手が子どもであっても言葉遣いなどには非常に厳しいが、その反面ノブヒコが理解できないような難しいことは、納得できるまで説明してくれる人物。

問7 この文章についての説明として正しいものには○を、間違っているものには×をそれぞれ付けなさい。

ア ノブヒコが複雑な人間関係の中でさまざまなものを学び、不幸な少年時代をたくましく生き抜く姿が描かれている。

イ 作品の舞台となる中国山地の山々の自然が生き生きと優しく描かれる一方で、厳しい自然界の掟も描かれている。

ウ 「同年四月八日」「昭和三十六年八月」など年月を正確に記し、主人公の視点から描くことで日記風の作品となっている。

エ 登場人物の気持ちの変化を季節の変化に重ね合わせて描くことによって、作品全体に奥行きを持たせている。

オ ノブヒコが中国山地の自然や周囲の大人たちの愛情に育まれながら、心身ともに成長していく様子が描かれている。

三 次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 友人の言葉をマに受ける。
- ② ロウホウが届く。
- ③ 患者がショウコウを保っている。
- ④ 身をコにして働く。
- ⑤ 喜びイサんで家を出る。
- ⑥ お金をクメンしてもらう。
- ⑦ 候補者がガイトウで演説する。
- ⑧ 卒業式をキョコウする。

